

★〈「浜市川いちご」から「八戸いちご」へ〉

市川地区の地域おこしとしてのいちご栽培は、「7人のさむらい」といわれた人たちの努力と工夫の上に問題点の発生や挫折をかかえながら軌道にのっていった。その事情については「市川を調べる」11号、12号で紹介した。

現在、「7人のさむらい」も木村仁松さんだけが元気であり、いちご栽培はその後継者たちに受けつがれている。木村徳男さんの後を継いだ木村進さんはそのひとりである。



★〈後継者たちの苦労〉

いちご栽培は決して順調に進んだというわけではなかった。木村進さんはとりわけいちごのハウス栽培に意をそそいだ。青森県でも冬にいちご栽培を行い、そのことによって収益の増大を一そうはかることはできないか。

しかし、ハウスを利用しても冬の低温でいちごの苗は育たない。そこで、ボイラーで気温を上げたり、電気による照明によって昼を長く見せたりした。つまり収穫時期を1月から6月にかけて行えるように工夫をした。勿論木村進さんひとりではなく、何かと「さむらい」の後継者たちの協力のもとでだった。

(デーリー東北新聞、いちご栽培記事を参照した。)

いかづちたい

雷平の神社仏閣(1)

多賀台 星 一郎

(1)〈多賀台周辺を歩いて〉

風穴平^{かざあなたい}について新撰陸奥国誌^{しんせん むつこくし}では「枝村轟の北二丁にあり十丁四方計今雷平^{いかづちたい}と言ふ。」と述べている。いささか場所的には合致しない点もあるが、現在の大字雷平・及び南雷平は東の先端にあり、包括されていたと思う。古老から、当所は落雷の名所と聞かされており、また、雷^{てんじん}は農耕の神様でもあり「天神^{てんじん}」と敬うことから改名されたのではないか。

八戸市が新産業都市に指定され、その中心部が産労住宅地となり、航空用アンテナ用地と一面のデントコーン(動物用の飼料トウモロコシ)畑のあるこの土地が「多賀台団地」と命名、八戸市2番目の本格的な中高層団地として建設された。しかしながら、その中高層産労住宅も40年有余の歳月を経て大部分はすでに分譲され、一般住宅に建て替えられている。

時の流れは、遺跡にも指定されている旧地名である雷平時代の文化の存在も確かめることなく、疾風のように次世代に押し流され、消えようとしている。

「八戸煎餅^{せんべい}のミミのよう」に団地周辺に残された旧地名を四季に渡り歩いてみた。鶯^{うぐいす}、山鳩^{やまばと}、郭公^{かつこう}、時鳥^{ほととぎす}、鷓鴣^{みそざい}雉^{きじ}などの野鳥の鳴き声を耳にする。昔、傷ついて我が家に飛来した梟^{ふくろう}を思い出しながら木立の中に「駒峯神社」、
「雷平光明稲荷^{だきにてん}」、「善光寺薬師^{しせんざん}」、「雷平稲荷・蛇枳尼天^{だきにてん}」、「市川山願成寺」など、右横書きもある〈命名額〉を目にしてきた。

また、雷平の西境であると言われる底幅半間程で100メートル以上の土盛りも再確認出来た。これらの神社仏閣・土盛りなどは、先人の信仰や生活に深い関わりが有り、縁あって今ここに生きる者がしっかりと受け止め、活かし、次世代に引き継ぐべき役目があると思い、調べに着手した。(以下、次号へ。)

※「だきにてん」は、一般に「陀枳尼天」または「荼枳尼天」と表記されるようです。

参考資料:「新撰陸奥国誌」(68号)